

小倉百人一首 「上の句」 一覧表 (歌順)

50	君がため 惜しからざりし 命さへ	100	もしきや 古き軒端の しのぶにも
49	みかきもり 衛士のたく火の 夜は燃え	99	人もをし 人も恨めし あぢきなく
48	風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ	98	風そよぐ ならの小川の 夕暮れは
47	八重むぐら 茂れる宿の 寂しきに	97	来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに
46	由良のこを 渡る舟人 かちを絶え	96	花さそふ 嵐の庭の 雪ならで
45	あはれとも いふべき人は 思ほえて	95	おほけなく 憂き世の民に おほふかな
44	逢ふことの 絶えてしなくは なかなか	94	み吉野の 山の秋風 小夜ふけて
43	逢ひ見ての 後の心に くらぶれば	93	世の中は 常にもがもな 清濁ぐ
42	契りきな かたみに袖を しぼりつつ	92	わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の
41	恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり	91	きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに
40	忍ぶれど 色に出てにけり わが恋は	90	見せばやな 雄鳥のあまの 袖だにも
39	浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど	89	玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば
38	忘らるる 身をば思はず 誓ひてし	88	難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ
37	白露に 風の吹きしく 秋の野は	87	村雨の 露もまだひぬ 槿の葉に
36	夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを	86	嘆けて 月やは物を 思はする
35	人はいさ 心も知らず ふるさとは	85	夜もすがら 物思ふころは 明けやらぬ
34	誰をかも 知る人にせむ 高砂の	84	長らへば またこのごろや しのばれむ
33	ひさかたの 光のどけき 春の日に	83	世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る
32	山川に 風のかけたる しがらみは	82	思ひわび さても命は あるものを
31	朝ほらけ 有明の月と 見るまでに	81	ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば
30	有明の つれなく見えし 別れより	80	長からむ 心も知らず 黒髪
29	心あてに 折らばや折らむ 初霜の	79	秋風に たなびく雲の 絶え間より
28	山里は 冬ぞ寂しき まさりける	78	淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に
27	みかの原 わきて流るる 泉川	77	瀬を早み 岩にせかるる 滝川の
26	小倉山 峰のみぢ葉 心あらば	76	契りおきし させもが露を 命にて
25	名にし負はば 逢坂山の さねかづら	75	わたの原 漕ぎ出でて見れば ひさかたの
24	このたびは 幣も取りあへず 手向山	74	憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ
23	月見れば ちちにもこそ 悲しけれ	73	高砂の 尾の上の 桜 咲きにけり
22	吹くからに 秋の草木の しをるれば	72	音に聞く 高師の浜の あだ波は
21	今来むと 言ひしばかりに 長月の	71	夕されば 門田の稲葉 おどつれて
20	わびぬれば 今はた同じ 難波なる	70	寂しさに 宿を立ち出でて ながむれば
19	難波瀧 短きあしの ふしの間も	69	嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は
18	住の江の 岸による波 よるさへや	68	心にも あらで憂き世に ながらへば
17	ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川	67	春の夜の 夢ばかりなる 手枕に
16	立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる	66	もろとも にはれと思へ 山桜
15	君がため 春の野に出でて 若菜つむ	65	恨みわび ほさぬ袖だに あるものを
14	陸奥の しのもちぢり 誰ゆゑに	64	朝ほらけ 宇治の川霧 たえだえに
13	筑波藩の 峰より落つる 男女の川	63	今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを
12	天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ	62	夜をこめて 鳥の空音は はかるとも
11	わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でてぬと	61	いにしへの 奈良の都の 八重桜
10	これやこの 行くも帰るも 別れては	60	大江山 いく野の道の 遠ければ
9	花の色は うつりにけりな いたづらに	59	やすらはて 寝なましものを 小夜更けて
8	わが庵は 都のたつみ しかぞ住む	58	有馬山 猪名の笹原 風吹けば
7	天の原 ふりさけ見れば 春日なる	57	めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に
6	かさぎきの 渡せる橋に おく霜の	56	あらざらむ この世のほかの 思ひ出に
5	奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の	55	滝の音は 絶えて久しく なりぬれど
4	田子の浦に うち出でてみれば 白妙の	54	忘れじの 行く末までは かたければ
3	あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の	53	嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は
2	春過ぎて 夏来にけらし 白妙の	52	明けぬれば 暮るるものとは 知りながら
1	秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ	51	かくとだに えやは伊吹の さしも草

他プリント



小倉百人一首 「下の句」 一覧表 (歌順)

50	長くもがなと 思ひけるかな	100	なほあまりある 昔なりけり
49	昼は消えつつ ものをこそ思へ	99	世を思ふゆゑに もの思ふ身は
48	くだけてものを 思ふころかな	98	みそぎぞ夏の しるしなりける
47	人こそ見えぬ 秋は来にけり	97	焼くや藻塩の 身もこがれつつ
46	行く方も知らぬ 恋の道かな	96	ふりゆくものは わが身なりけり
45	身のいたづらに なりぬべきかな	95	わが立つ杉に 墨染めの袖
44	人をも身をも 恨みざらまし	94	ふるさと寒く 衣打つなり
43	昔はものを 思はざりけり	93	海人の小舟の 綱手かなしも
42	末の松山 波越さじとは	92	人こそ知らね 乾く間もなし
41	人知れずこそ 思ひそめしか	91	衣片敷き ひとりかも寝む
40	ものや思ふと 人の問ふまで	90	濡れにぞ濡れし 色はかはらず
39	あまりでなごか 人の恋しき	89	忍ぶることの 弱りもぞする
38	人の命の 惜しくもあるかな	88	みをつくしてや 恋ひわたるべき
37	つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける	87	霧立ちのぼる 秋の夕暮れ
36	雲のいづこに 月宿ららむ	86	かこち顔なる わが涙かな
35	花ぞ昔の 香にほひける	85	閨のひまさへ つれなかりけり
34	松も昔の 友ならななくに	84	愛しと見し世ぞ 今は恋しき
33	静す心なく 花の散るらむ	83	山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる
32	流れもあへぬ 紅葉なりけり	82	憂きに堪へぬは 涙なりけり
31	吉野の里に 降れる白雪	81	ただ有明の 月ぞ残れる
30	咲ばかり 憂きものはなし	80	乱れて今朝は ものをこそ思へ
29	置きまどはせる 白菊の花	79	もれ出づる月の 影のさやけさ
28	人目も草も かれぬと思へば	78	幾夜寝覚めぬ 須磨の閑守
27	いつ見きとてか 恋しかるらむ	77	われても末に 逢はむとぞ思ふ
26	今ひとたびの みゆき待たなむ	76	雲居にまがふ 沖つ白波
25	紅葉の錦 神のまにまに	75	あはれ今年の 秋もいぬめり
24	わが身ひとつの 秋にはあらねど	74	激しかれとは 祈らぬものを
23	むべ山風を 嵐と言ふらむ	73	外山の霞 立たずもあらなむ
22	有明の月を 待ち出でつるかな	72	かけじや袖の ぬれもこそすれ
21	みをつくしても 逢はむとぞ思ふ	71	蘆のまろやに 秋風ぞ吹く
20	逢はてこの世を 過ぐしてよや	70	いづこも同じ 秋の夕暮れ
19	夢の通ひ路 人目よくらむ	69	竜田の川の 錦なりけり
18	からくれなるに 水くくるとは	68	恋しかるべき 夜半の月かな
17	まつとし聞かば 今帰り来む	67	かひなく立たむ 名こそ惜しけれ
16	乱れそめにし われならなくに	66	花よりほかに 知る人もなし
15	恋ぞつもりて 淵となりぬる	65	恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ
14	をとめの姿 しばしとどめむ	64	あらはれわたる 瀬々の網代木
13	人には告げよ 海人の釣舟	63	人つてならで 言ふよしもがな
12	知るも知らぬも 逢坂の関	62	よに逢坂の 関は許さじ
11	わが身世にふる ながめせしまに	61	けふ九重に にはひぬるかな
10	世をうち山と 人はいふなり	60	まだふみも見ず 天の橋立
9	三笠の山に 出でし月かも	59	かたぶくまでの 月を見しかな
8	白きを見れば 夜ぞふけにける	58	いてそよ人を 忘れやはする
7	声きく時ぞ 秋は悲しき	57	雲隠れにし 夜半の月かな
6	富士の高嶺に 雪は降りつつ	56	今ひとたびの 逢ふこともがな
5	長ながし夜を ひとりかも寝む	55	名こそ流れて なほ聞こえけれ
4	衣ほすてふ 天の香具山	54	今日を限りの 命ともがな
3	わが衣手は 露にぬれつつ	53	いかに久しき ものどかは知る
2	衣ほすてふ 天の香具山	52	なほ恨めしき 朝ぼらけかな
1	わが衣手は 露にぬれつつ	51	さしも知らじな 燃ゆる思ひを

他プリント

